

自然と文化科 活動記録

日時	2024年6月21日(金) 10:00~12:00	担当者
場所	福島区民センター ホール	文：猪野 守 写真：田中 朱美
備考	聴講者数：1班21名 2班22名 3班20名 4班17名 全80名	

公開講演会のテーマ【防災教育を問い直す 防災の「パフォーマンス」の重要性】

講師：城下英行〔関西大学 大学院社会安全研究科・社会安全学部 准教授〕

略歴：専門分野は防災教育、防災学習論。2010年に京都大学大学院情報研究科博士課程を修了し、関西大学社会安全学部に着任。知識・技術の一方向の伝達という防災教育の問題点を両側面から検討し、より拡大された防災教育のあり方を模索。2019年にイギリスのレスター大学の研究者とともに回避可能な死を減らすための国際ネットワークを立ち上げ取り組みを行っている。



要旨（城下先生の資料から）

現代を生きる私たちにとって災害とは、現在の当たり前を支える社会システムが機能しなくなることと言えます。

当たり前が機能している、すなわち、普段通りの生活ができている限りは、地震が発生しても、台風が上陸しても、災害とは認識されません。

そのため、現在の防災対策は、地震発生時や台風襲来の際でも普段の生活を維持するための手段が中心となっています。しかし、災害とはそうした対策を超えたところで発生しますので、事前に具体的な防災対策を知って、それを行うだけの防災教育では不十分です。災害によって当たり前が機能しなくなった時に即興で新たな仕組みを作ることができるようになるための防災教育のあり方についてお話いただきました。

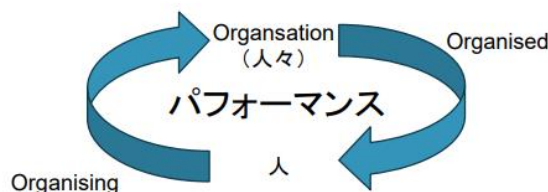
講義内容から

災害とは、現在の当たり前を支える社会システムが機能しなくなること。

1959年の伊勢湾台風で5098人が死亡したことを受けて1961年に防災対策基本法が成立。1995年の阪神・淡路大震災が契機となり防災教育に力が入れた。

下図のように防災の知識や技術の伝達は人が組織から **Organised** されるプロセスである。災害に対応するためには人々が人々を **Organising** できる必要がある

防災は災害とは認識されない領域である
減災は比較的軽微な災害と認識される
防災教育には3つのアプローチがある
強い防災・弱い防災&減災・強い減災



災害に対応するためには、Organisedと Organisingの両方が必要＝パフォーマンス

災害・減災・防災

比較的軽微な災害と認識される領域（当たり前の一部が機能していない）



災害とは認識されない領域（当たり前が機能）

関西大学

所感：

各地で発生している大地震の被害映像を見るたびに、災害に備えなければと思いを強くするが、転倒防止等なかなか完全にできていない。（高所に重いものを置いたままになっている、いざという時にドアを開放する仕組みになっていない等）防災の技術を実際に行動に移さなければとくれぐれも思う。先生のユーモアを交えた判りやすいお話に新たな決意をいたしました。